【PBLツアー：北海道 夕張編】

夏休み企画「PBLツアー特集」の第四弾は、北海道の夕張です。

4泊5日で実施されたPBLツアー。私たちは北海道夕張方面を中心に活動を行いました。「伝統的な民族文化」と「地域の再生・活性化」に関心を持つ生徒たちが集まり、各々のグループが立てた仮説や疑問を解決するため、熱意をもって探究に取り組んでいる姿が印象的でした。今回はその様子を紹介したいと思います。

夕張市は、かつて北海道の炭鉱都市として栄えましたが、現在では財政問題と人口減少という課題に直面しています。石炭博物館で夕張市の発展と衰退と歴史を理解したうえで、有識者の方から都市計画に関する講義やフィールドワークを通じた都市再生について学びました。

学術的な都市に関する知識だけにとどまらず、実際にその地域で暮らす方とコミュニケーションをとることで、都市が生きていることを実感できたのではないでしょうか。

伝統的な民族文化に関する理解を深めるため、二風谷アイヌ文化博物館、ウポポイ（民族共生象徴空間）の二か所を訪問し、北海道のアイヌ民族に関して学びました。

アイヌ民族の生活様式や文化については、事前学習で一定の知識があった生徒たちですが、アイヌ民族の伝統装束や食事、音楽などの文化に直接触れることで、その技術力の高さや独自性、精神性を生きた知識として吸収できたようです。

他にも、千歳市役所の方に行っていただいた地方活性化についての講義や、障碍者スポーツの体験、支笏湖の水中に広がる地形やそこに暮らす生物について学ぶプログラムなど、生徒たちは北海道に関するさまざまな知識を得ることができました。

訪問先の一つである札幌大学では、現役教授から研究活動に対する基礎・基本の講義を受けることで、探究活動への取り組み方がより明確化しました。これらは、現地の方々によるサポートがあったからこその内容です。

生徒たちには、学習した知識だけでなく、様々な人たちに支えてもらうことで、今回のツアーに参加することができているという感謝の気持ちを感じてもらえたことと思います。
私たちが北海道に来た目的は「修学旅行」ではなく、社会探究活動の一環としての「PBLツアー」です。毎晩行われるミーティングでは、

その日学んだ内容を振り返り、事前に立てた仮説検証や課題解決のための提案などをグループで実施します。東京に戻ったあとも活動を続け、郁秋祭までに研究成果として形にしていきます。

　今回のPBLツアーでの経験をきっかけに、郁文館生から地域の再生に、またはアイヌ文化の理解・継承・発展に関わることのできる人材が現れることを願っています。実際に経験することを通じて、生徒たちの知識はより具体的なものになり、探究活動への熱意も高まっています。ぜひ、彼らの活動の成果を郁文館の文化祭「郁秋祭」でご覧いただければと思います。